

「障がい」を「障がい」ではなくするために

綿打中学校 三年 川島 琥珀

皆さんは、「障がい」という言葉を聞いて、どのような事を思い浮かべますか？不幸だと思いますか？可哀想だと思いますか？それとも、からかいの対象ですか？

私はこのどれにも当てはまりません。私は一つの個性と捉えているので、そのようなネガティブな発想にはなりません。なぜなら私の弟には障がいがあるので、とても身近なものだからです。

障がいをもつ人が家族にいるということは、正直なところ大変だと感じることもあります。私の家の場合は、少しの間でも弟を一人にはできないので、友達と遊んでいる時も早めに帰ることがあります。近くに住んでいる祖母も協力してくれませんが、私が弟のうちの処理をすることもあります。ですが私にとっては大切な家族に変わりありません。

いつか母と、タイムスリップをするならいつに帰りたいかという話をしたことがあります。「弟がいない人

生も選べるよ」と母が言いました。私は弟がいない人生は考えられないと答えました。

弟は療育を受けるために、保育園ではなく邑楽にある事業所に通っていました。そこでは発達障がい、知的障がい、身体障がいをもつ学校に上がる前の子が生活しながら、生きるために必要な力を身につけています。

その事業所で親子遠足に行った時のことです。道中、自己紹介がてら一家庭ずつ、最近のちょっとした出来事を話しました。日々の些細な瞬間が成長の証であり、プライズレスな時間であることを感じました。我が家でも毎日、おもしろワードが飛び交い、私は愛おしくてもたまらない気持ちになります。弟は最近、色の名前が分かるようになってきて、私がイチゴを指差して「これは何色？」と聞くと元気な声で「赤！」と答えます。そのあと弟は楽しそうに「どんな色が好き」という歌をエンドレスで歌います。バスでの移動中は、終始和やかで、その子のありのままを受け止めている空気感が、とても心地が良かったです。

両親ともに子どもに関わる仕事をしているので、両親の話の話を聞いていると、大きなやりがいを感じている事がわかります。

先日、母がクラスにいる自閉症スペクトラムをもつ子どものために手作り下駄箱を作っていました。私も一緒に手伝いました。視覚からの情報のほうがわかりやすいという特性を活かし、上履きのイラストを貼ることで場所がわかりやすくなる事を知りました。ほんの小さな配慮で、生活の中の困り感を減らす事ができるという事を感じました。配慮がある事で物と人の隔たり、つまり物理的な「障がい」は変えられるのです。

しかし外出した際に、弟が大きな声を出すと、白い目で見てくる大人や、それを笑う子どもの姿を見る事があります。大きな声を出すことにも何かしらの意味があるのに、障がいの理解の薄さから弟がからかいの対象になっている事がとても、悲しく、悔しいです。なぜ、障がいをもつ人がその行動に至ったのか想像するだけで、今よりも優しくなれるはずですが。

悲しい事ですが、学校でも「障がい」という言葉がからかいの言葉としてとても軽く使われています。それは障がいをもち当事者とその家族にとって言葉に尽くせないほど悲しい事です。軽はずみに嘲笑う言葉にしないで下さい。からかいの対象にしないで下さい。そして皆さんにお願いがあります。決して、障がいを

もっている人に対して、不幸だとか可哀想だとか思わないで下さい。

私は、弟がいることで自分の人生を見つめ直す機会が多くあります。ゆっくりだけど成長している弟を見ていると、そういった手助けをする事に就きたいと考えるようになりました。弟が実際に受けている理学療法を見学したり、父や母の職場で体験や交流をしたりすることで、自分の気持ちが変わりました。

物理的な障がいは人の手で取り除くことができません。考え方を変えることで障がいへの隔たりをも無くす事が出来ます。

私が思う「障がい」を「障がい」ではなくするためには、自分の体験を自分の言葉で多くの人に伝えることです。障がいに対して正しい理解をしてもらうことです。障がいの有無に関わらず、全ての命は今を精一杯生きています。生ききろうとする努力の中に命の輝きがあります。皆さんもこの命の輝きを一緒に守って行きましょう。